武江年表

一

伊地知文庫
文庫20
383
2

文庫20
383
2

伊地知氏書冊

寛永十七年　丁巳　三月改

三月天海僧正志願ありて切經二千卷を刊行せしめらる（上野に於て）

（天海僧正は元和二年より寛永二年まで）

（いたりて成就せしといふ）○又月萩生元甫率領茶筅ども葬儀に迴漢の祖父なり○七月八日星月を奪く○十月肥前の高木ふ耶蘇宗の悪輩紀伊に遷る年二月深紙あり

○江戸中風呂屋女二人殺りふ命しぬふ（此擬を殺りしものを吉原大門の外にて刑せらる）

同十八年　戊寅

夏ころより本年二月に亦至るまでて遠国の男女伊勢宗廟に詣する事殿（をろいそもの　おりけまり多）

○東光山西福寺祈願寺とり濱茶屋形建て移る
○十一月品川宿松山東海寺御創立　開山沢庵和尚
○今年以来雲国の貢を止めらるゝと云

寛永十六年　己卯　十一月改

後府御城蔵書書院書籍命せらる
○宮田勘右衛門検刻　開山貞義和尚濱茶屋あり
　ふる観世書をあつめたりとぞ

同十七年　庚辰

正月日光山廿五回御神忌万治例行有○正月より八月まで
天下平安なる○然頃何某殿ふしつゝせ御用九条中
りつる天下の年十六　男色の名地おとりて今年正月同藩細川忠利
り其名を切害しなを同月それの日を忠利命せられ濱茶屋

り殺害の同月をあふ九条と男色の聞あり〜同藩永川
宗安と出つる天下の年十八　も変ふ有て俱ふ自害して失なるを然る
世のうつりさとあり〜けるこそ　九条稚世の年
まゝ花好き月あとたゝれてあるあり〜ひも美のまゝ
宗安稚世の年
もゝとせ　いさゝか家もこゝあり死のいときそこえんたそのの山川
元頼素を恋しつる藤屋物語といつる草紙一冊巻を養ふ物語て
似たる洋あり〜仮名編の男色大鑑ものを巻を載せり　物語ふ巻ふ
濱茶屋物語の躍まあり〜仮のまゝあり后多本西〜うり貞享年今の地うる
又死の姫田亭義なまち浮を似り巻のあり〜類て世人巻の浦〜迷れさうを今
本義せり　○六月長宗公耶蘇宗の族黒船一艘ふ来長崎〜漂着のりの
六十余人を誅せらる○九月六日出羽山ふる

久米を情こまやかにまんまの名とりて是を海鼠の月　沃菴

寛永十八年　辛巳

正月廿九日夜桶町より出火大風海辺まで吹けて焼る町数九千七町武家
寺百二十軒程慶長以来の大火と云へり

○拙家系図二百七年巻家拙　拙道春先生を藤原士郎
九山の傍に拙庵撰ありしと云

○東叡山寺大師院に巡行執事勤る　上野立源天祥社に満天祥
を合祭る○柏木村円覚寺菩提寺再建

○二葉村を窓の通町と号る　元禄六年又改
小川町といふ○東叡山の樹間より出る煙
稲荷社○青柳の貝塚より発掘する

○七月　長命ありて雑山生まる権現縁起撰述あり後八特牲
立馬の業あり○秋茶数樹不形不熟○八月朔日大風数十艘の石
船正川津に流れ　後流人この石を拾と号一漁網に掛りしに一艘に乗る十一年
又月日仔細なし拙府川より大石を拾ひ一処に沈没せ一処を拾と
号る○八月中国高麗寺山仁王像を造　異国代始の仏像
宗海上人とあり
○地震　浦淳　山地

同十九年　壬午　九月閏

正月朔日大雪○二月大雪○二月十九日浅草寺焼亡　此時本村市系
を助く拙稿の通書に流れられて　といふ事長稿
あり此時仏像の門おとりの失なり○三月十三日深雪
○二月より七月に至り天下大飢饉米価貴騰し死人多し此歳米
穀を納る○夏駿府伝寺に天下向あり又月初旬出浴の日澤庵師一宗要を
弱なり事暁に出る○二十二間堂始て遠　基三人形出現　弓師伝授八千海伝
正月江戸人多し法華経十万部造営ありしと云　拙庵八千海伝

とり出今宮天王をのりそつて流水の強弱をつのりてつひに成就せずそうふを
観世音と八幡宮の御体ハ傍正宮殿あり〜ところといふ
○わぐま掛渡釋迦 吉宗御見記の始あり

寛永二十年　癸未

六月朝鮮人来聘 正使尹順之副使趙絅従事申竹堂孫波平整ちまりこのとき
申竹堂ふとりて林春斎書徳二比丘生年朝鮮詩を
著さをり ○今年六月羅山比丘生春斎子ふくともふ山王祭りを看るの
記あり出生の集ふ貞人西 ○羅山書齋二比丘生上京発来記術あり
○八月永代橋八幡宮新造始ふ ○十月二日天海僧正寂 歳百二十三といふ
二月とり毘沙門堂法門跡江海僧正法印職あり
○十八年の冬とり今年まで洪水続りり ○ひつまめくり板橋二宿
始書名を色青淵と云一説ニ色ハ代鶴と様の花を表ふる説ハ文中ま
ちまちを考へり色ハ椿の色青ハ鶴の音といふ意あるよりの説なり
江戸の名所を詠りの詩書を始とす

井上稲富右衛大尉の町屋を減らまし一所を後築立て浜地例といふ
○正忠沈香丸天ハ寛永中天海僧正の秘法ニ比叡山の麓行生僧
を撰さうゝ山と称ふ谷河某侯僧正ゆ熟熟ゆるが故後茶ハ出番僧
の手伝人員をして公用終りて后班を山を築しめ〜所あり
○弟久保八幡宮御再建あり ○佛日山東禅寺ハ平麻布吳服
坂ゆ宗剣ありしゆ寛永年今の宮崎の地ゆ移さる霊十南上人開基
のちなまをハ坂の名をもちよりぐり
○寛永年中日谷一行院宗基本尊上人寂 始ハ市井法丹後の奴隷ゆして
映年僧となりゆ日住長を降 ○海鼠橋とり松屋橋深川橋近の川通り八丁堀 寛永年船
行きを不を
通用の為ゆ長八丁ゆ掘通さる一所と云 ○同赤瓦動寺動坂の寺廃ゆ

ありしを堂地を今の所に移し丹後町雑子町の續きに移す丹後も敵屋敷なり

○寛永の頃まで祇園橋本町雑子町の續きに移す丹後も敵屋敷なり

なりし丹後殿弟と以て堂を異しして丹前と云ひ此辺風呂屋多く美麗

なる湯女もありてこれに遊ぶ客人木のさるを弄び妓に学ひて

丹前風といひしを洪書に丹前元禄年間に云ふ異一川

（引き写し兼良の江戸図に既に

江戸田度の古井記に洛りこれ

の事正保の江戸絵図に

○寛永九年横行の江戸絵図あり

ひぢや町

これ祇園町と皆海辺なり後に新地を築き造り今の

浜沈の所に江戸名所の水上にあり　本に記せる芝長の

浜とは今の芝べし

吉原町は廓内に江戸町すみ町京町新町げん蔵町と云ひ　慶長二年の

なり　思安橋は今の荒布橋と同じ元禄

と有　築地橋は今の荒布橋

濱草御門内なる鳴町辺も流武家のこれ

ち流は雲光院

唯今も地蔵院

蟹洲の御小姓屋敷

多くは天王院高げんも彩ちなる

本せんも大せうもせんりうも紀見院本あり　東祇園の地も武家方も流のこと

法ちんじ

あるせうも法せうも

江戸ちんもあり

今茅場町某所堂の西の新に長久寺もあんけうも

あり同所向ふ南八丁堀まで強に流多ろし

大橋も並服も今の所

ふ動院てのれいも某寺も

上に引き寺ふ法も十日ちうせんじ大正ちん紀を法こう流めこれも大ろし多門も主せんも

親寺ちん久寺も大ちうじすいこうじ長りんも世うこん〜永久ん〜ゑ法も大ちん〜そう

りんじ海うんじ〜ちんせんじちん大じ新戒も大向も法性も某所堂大せん大せも朝性寺

法ちんじ本あり　○今の深正橋向ふ八丁堀の名ふ

くぼ　町名今と遠へるハちべ町　今の日本橋

十日市の名　六十日河岸　大伝馬町裏

今云播磨　青橋町　今お留丁と浜の丁

の名あるうあり　ま松町　今留田の後

南裏

あり　ふき屋町　今金吹町　だんち屋町　今小網町　うきぐく町　今小あ三町

員数子店辺　大ふな町　今の本

舟丁之

弱きまち　今長谷川町　ゑとう町　今和泉町　ひぢや町　今芝口　白川町　今彩ちや丁の辺　めつく町　神田

の俗称　新小田原町　三河丁の俗称之有や　ちんちん八町　今の小伯耆丁と云ふ丁の辺之此頃の番ふハ考兵

称　四ちまて丁の俗称の称　左ち橋町　今田川丁神田丁の名　同朋町　芝神明の前

明ふくいるあり丁　大橋　今の乃堅橋

後義橋（今呉服橋あり寛文この図に記せり）　こごくじ（今の石川島あり）

以上寺院の号町名文字詳なるされい系本に拠りて仮字のまゝ記せり

○江戸絵図摂政すゝ事は寛永ゆ始りしあや其ゝ以ゆのゆめ世ゆ

作ゝ此時代の図ゝ南は世橋ゆ世ゆ始り西は駿河端翠町の

入口溜池を沿り北は小川町神田川流茶橋を沿り東は大川を沿り

て載る所の方域狭し（兼題江戸繁昌の図　寛文以ゝ後ゆ廣くなりて

○世上通用の書籍の記ゆ一筆啓上致しと書く事は此ゝ

始ると見えたり女子の一筆と書く事は古記又ゆ多くこれ

ありとなん（東海道膝栗毛）

○本村氏十郎云致ゝ績武家関係云按第は寛永の末ゆ江戸にて

如来ゝ生ゝ所は狭斗といふのを用ゆ是さへ芝の浜津田長門ゝ

始て製ゝ葛籠も稀ゆ事ゝ当番の徒士数具を水桶袋ゆ入れを

番袋ゝ名付りゝ世ゝ始ゝ云く

○薩摩小平太（泉孫堀の寿武紀後養と云）江戸ゆ下り中橋ゆ於て揚屋を興行も

是出先は向陽儀耕の二子を誘引して九郎世ゝ出ゝ

ゆ集ゆあり之ゝ事平ゝ声曲教集り有りせり　○東海名所ゆ浮瀬

浮流絵ゆ人形は一名鬼ゝ寛永元年以後追ゝ京大坂ゝ下りゝ

しものゝ事といふゝ

○花踊り（ひんざ節）ゝ下り所撥あどいふる小唄行る（是浮世所流と

時代ゆ

いふる小唄もこの

踊ゝ　貴族婦を言ひ情花を弄ぶ事ゝ行る（あづまめぐりゆ寛永の頃の

ゝ事ゝ物をいふる俳ゆ多く

うんだなをひきせる親世ゝ事ゝ今春ゝ云

ゝんとゝ女の羽織を反ゝうけて用ゆるゝ

○中島浮雲といふものゝ江戸ゝて求肥飴を製し始む

○春蔓獨語ゆ云寛永の頃風俗男ゝ事草のうちゝ草の袴を

夜着と〻女は紫草の足袋を穿たるもあり男は黒羽二重の帷子に麻の袴を着し婦女乃至は今様を染羽織の袖とし或は梅模様を画くふ縞付て長を鉢の木に付ふ多分て殆京しける高さ五づつふ縁尺の二寸計の紙をんとして縁おど入る事あり二月より八月まて婦女の礼被手縁おく高さ縁尺の八分より次を後ふ結ひたるを付節とす今の小袖節は昔の節よりも高し中略男女の衣被昔と極て質素なり男子も女子も十に及ずまて六七歳を過るふむしは縁尺に七八寸を極とせに貞享の比より五尺計手あり丈夫なるはかくまでに長くありて近き比は二尺に及ず手ふりぬと見る婦女の節も貞享元禄の比よりも漸く高くなりて今は縁尺おく八九寸ふ及ふ綿を右んとして褥のごとしはとこの

肩衣といふものは昔と麻の帽縁尺の八寸計なりしふ貞享元禄の比より帽子尺ふ及ふ寛永の比と婦女細き麻縄にて髪を結ふて其上を黒き絹にて巻しふ中後麻縄を止く紙にて巻ふ内の婦女皆是を用ふ丈夫なり結紙にて巻事も止ぬ中略江戸の婦女外ふ出るふむしはいきまき結ふて頭面を包こ用ふ又あるいは其後絹にて頭面を隠しみしは家二十あまり宝永の比より高く今は小さく縁を附ふ付こきさるのこまて面をは小さくしたるやう成歟ふて道を行中略男は面をあらはにすの流ふ袖は編笠の肩の上とうるをうるは踏しうる比女の帽子をうりて面をうく紙もあり後の比中ふ後面のあらく

ある物をつくり付て同計りをあるまして乃を汐もあり亦世乃の
男ハ小袖の裏を紅ゆ〜或ハ紅の肌衣を袖に出ふして袂をまくふ
計ゆ〜するひろめろ作るりのゆく見て如ハ〜りて縹の裏ゆ紅裏
あとを為るめり（下）器足ハ寛永の比より元禄の比までの風俗を云
まゝなり（その比婦女の着ゆ小袖の縫箔ハ世中式草の是袋ゆ山東の骨董集考ゆつまびらか）
○八水隨筆ゆ云世ゆ素襖の袖を切て上下ゆ〜〜りしハ松永弾
正ゆ始るといふ事よく人の知る所なり麻上下の袖を切ゆも遠
〜ゆ事なり裏付上下ハ小堀遠江守ゆ始て云
せ〜まゝ〜とり弘まりて今常服ゆまり夏の肩衣ゆ為物を用
る事ハ松平豆州侯より始る源子肩衣ゆ裏を用ひゆ〜ゆ始
遠江侯二男改平ゆ〜まるといふ又老人雑話ゆハ（村雨氏編）肩衣

半襟ハ近衛殿山ゆ始まる〜〜あり
○木綿長袋今の製法のゆ〜ゆあるハ世長家の母始て製ゆ業ゆ
ゆ物ゆ〜ゆ始ゆ〜れゆ世老人雑話ゆ見て元ゆり
○答原名紙ゆ太閤家昌寛永中大和村長兵衛摂津南部を連て
江戸へ下向ゆ（後ゆ世ゆ大和ゆ所ゆ右ゆ清ゆ世時江戸ゆ下り明暦之
年ゆ答原ゆ為り後ゆ子孫代〜江戸ゆ住ま
○寛永の頃大伝馬町の豪家伝ゆ葉ゆ家の婢女さけといふ
仁慈の志厚く朝夕の飯菜業藍家合ゆ乞物を乞ゆ人ゆ絶
ゆ〜ゆ人ゆ乞ゆ残まゆ〜ゆ又ハ流の陽ゆ細を拾てたまり物を
合ゆ常ゆ称名為ゆ〜ゆ右ゆ〜ゆ世乞ゆ比企彩ゆ為ゆ何ゆ
以老湯殿山ゆ参詣ゆ生ゆ身の大日如来を拝せんゆを願ひゆ〜ゆ

ヨガ形容を看んとあこがれ江戸ヨ発きて往久間某の婢女たけを妻
とし〳〵くいよ〳〵霊夢の告を蒙り彼家ヨいとい仏女を得たる後仏
如い念仏三昧ゆして大往生をとゲしかふ後往久間の親ぞく
る迷菓とり大日如来の像を造り〳〵めて湯殿山英令者ヨ納む
こをを世ヨお行大日如来と云 往久間の墓ハ場ヨも塔中ハ光院ヨあり〳〵後る
彼家の水盥ハ入りも光院 雨〳〵うつり〳〵ハ後流家の石塔ヨ三月ヨう
ヨ収めてあり也〳〵 ○寛永の比池森こいふ狂僧町ヨ落をとり〳〵る
ヨ〳〵んべ集りて年遠ひよとそうさいよくヨ成せり今以てうくのひて
氣遠の名月とあまり此池森ヨ成ヨ〳〵ヨ成るヨ〳〵ヨ実形ヨ〳〵て
人の実ひをうさ〳〵む後萬葉の古人躍念仏とて江戸大坂を
潮廻ヨ〳〵ヨ成ヨ〳〵ヨ彼池森のさ名ヨ仏〳〵うとて
池森念仏ともよびけるより世る後ヨいとり

正保元年　甲申　十二月十六日改元

正月廿四日御影堂吉長寺ヨ新造重縋七十三尺塔上ヨ石ヨ涅槃石を彫
○寛永年中浜松城向于潟百姓の地を掘て細村の漁人ヨ
〳〵今年二月漁家を建立〳〵年出の名を以て細高と号〳〵年國
の産土神往古明神を奉祀ル
○上野ヨ盲眼大師堂御建立 此時ハ盲眼大師の法号ヨ〳〵 ○青山治部院罪剣
○二月町人の長刀出銀芸能納の合羽ヨ出偽止あり又偽勢大山案
布堂を年ヨ〳〵てるヨ〳〵ヨ事を偽ヨ
○五月十九日琉球人来聘 正使金武王 副使ヨ〳〵ヨ子 ○清朝改治元年ヨり明亡ひて
一流ル ○本挽町六丁目長村長兵衛ヨ居始る二代目より後山村
長左衛門と改む 正徳元年ヨ〳〵り其居所絶ル

○十一月十八日右京冥墓人[illegible]死[illegible]六十九才今も深川雲光院に墓あり○十二月廿六日明人呉宗観卒二本榎上行寺に墓あり明朝の乱を避て来りし人なり○三十三回忌に当り人丸師彼岸に搬て久寿つゝ交代に久右衛門なるものの廉旅なるもの号し今ホ漢せり

正保二年　乙酉　五月閏

二月十五日月赤くして丹のごとし○二月廿二日国文坊右京国宗逝世して空仁と号しけるに世一才あり卒

彼僧の法世の初る所に墓ハ東元の山中観音院にあり

○多賀聚田明神流祖山谷[illegible]移る

山谷にあり○多賀山

深光院もしは野多賀移る

○江戸にて始て瓦を焼く

もの江戸瓦師の元祖といふ○十二月二日長崎に森卒八十三歳○十二月十一日東海道藤沢和尚寂

世寿七十三才に成頻に遺偈を請ふ師筆を立て美の字を書して座に

同　三　年　丙戌

十月漢土兵乱未止び明の残類軍戸に寄鄭芝龍と云

○冬半辺流松平宮剣

宮山に浮絵師

○金工平田氏祖道紀卒芝長中朝鮮人なり七宝流しの法を伝へし人なり

○大多賀氏伝祐右軍府祐廟に参中殺白を掌事あり亀戸村に寄居再興に

同　四　年　丁亥

二月六日小堀遠州政卒茂系改一蘇鬢の号宗甫今年六十九才之案孤山家菴に

伝に右田織部の門人茶道目利の人和歌に於泉州堺にの

江門人之説ハ

波河意甲賀時之

○四月十五日夜月の暈に方月新のごとく晩の月に現る

○四月廿日寄医諸迪院図南玄治法印卒　廣尾祥雲寺

子孫ハ

○九月十三日江戸大地震上野大仏の像破る○七月廿二日氷隙

大サ樽

○九月十五日刀剣同利本阿弥の終　織田家に仕へし人なり

○十一月十三日　台命ありて王子村に於て松平藩の武士退去
真行寺　高橋伝兵衛は十三日の夜小石川十軒坂邸の辺りに
　　しばらく休息ありて退去ありしの一説編輯あり
○十一月　糞掃某なる浪人向島地蔵堂の庭
　　世春海法師造立の苔蒸の御堂ありて庭内に一石あり云云

世事閑記事

正保中日向国霧島山の麓酒を醸造して大坂に売せ大坂にて糸
下り此比江戸周防国大山麓角と名付しの八丈縞に歩めひ西向無
之唐松の二種八丈唐二年の比武江に下り来りて機織して諸
品に成てより○大橋を常盤橋と改められし正保の始比なりと
○十河ひろひて家を始く事なる十河の家とは武家の人の改
名なきよりいひかる事と雖又世時代流行憂慮髭を好む東海道
品川に髭を雲雀の声に振りよりて云ふことなりしは松雲の声

○世事談に云ふ時代不定町髭の久吉物の泄を賣始めて後
二條市中宮賀瀧の五十嵐是を創まて江戸にて世の大好菴
　　武尾高の家に云ふ寛文中室町三丁目三尾屋方
　　中村ろまん物語世を忍ぶ者の元祖なりしかの髭町三尾
　　寛永正保の比髭を剃これ泄店の元祖なりしかの髭町三尾
　　るいかまぬるさまとしけるより高橋集に曰ふ格別上下ともに年若き男の髭に泄を分
　　ちにも男盛中の髭に泄を分ちしとなる未詳
○寛永正保の比長崎より唐人和泉屋庄三郎といふものの
江戸に来り泄の物に始て古書籍の賣買をなし後大業様
に成り見世賣買のたしなみ甚
○或古家の記に正保年中江戸図の写あり安藤を廣重川
源義角若橋本雑司谷辺迄ありて東は大川を限りて市中の長

寛永の図に等しく富井氏[ふゐ]の屋敷[やしき]を坂[さか]の門[もん]と称[しょう]し慶長[けいちょう]古蹟[こせき]の隅[すみ]に卜[ぼく]す
ゞ居[をり]あり日本橋[にほんばし]の西[にし]ざかりなん塚[づか]にあり芳[よし]ノ浦[うら]坂[さか]の辺[へん]ニ浦
能[よし]ノ助[すけ]屋敷[やしき]蔵[くら]なり東[ひがし]の方[かた]山[やま]の東向[ひがしむき]の門[もん]ばかり門[もん]前[ぜん]の茅[かや]ぶき
町[まち]ばかりのこるあり

慶安元年戊子　正月廿　二月十五日改元

世[よ]安[やす]く改元[かいげん]あり〳〵を

改元の詔[みことのり]世[よ]安穏[あんおん]の天下[てんか]　羊井卜養

○春荒蘭山[はるあららんざん]亮朝院[りょうちいん]七面堂[しちめんどう]建[たて]ばかり　寛文十一年[かんぶんじゅういねん]今[いま]のごとく
宮田[みやた]くうろさう
○谷中[やなか]延命院[えんめいいん]七面[しちめん]の霊[れい]動清[どうせい]　星山日朝[ほしやまにちてう]上人[しょうにん]ニ沢[たく]の乃[の]父七面[しちめん]ニ入[にゅう]の日の乃
霊[れい]〳〵ニ基[もと]ノ一枝[いっし]を盛[もり]ノ寺[てら]を創[そう]ス云[いう]
○正月十一日天海僧正[てんかいそうじょう]慈眼大師[じげんだいし]と諡号[しごう]をのゝ
○日光山[にっこうさん]三十二回[さんじゅうにかい]忌法[きほう]法華八講[ほけはっこう]あり　慶安[けいあん]の頃[ころ]法花八講[ほけはっこう]の元[はじめ]あり

○五月男色[だんしょく]をむさぼり禁[きん]ぜられ犯[おか]す者[もの]を禁[きん]ずる掟[おきて]行[おこな]はる
慶安[けいあん]元年[がんねん]の事[こと]なり分[わけ]て盛[さか]んに動[うごき]及[および]ひしの荷[にな]ひ物[もの]なり
いつり男色[だんしょく]の子[こ]ばかりなり止[とど]まらず止[とど]まらず寛文[かんぶん]の頃[ころ]ふたゝび又行[またおこな]はれ
ありて止[とど]まるよし同書[どうしょ]にいつり　昔[むかし]の方[かた]云[いう]男色[だんしょく]を禁[きん]ぜられ犯[おか]す者[もの]を流[ながす]ことゝ云[いう]
あれども流[ながす]ことゝ云[いう]ばかりなり
○九月[くがつ]ニ国[にこく]姫稲荷社建立[ひめいなりしゃけんりう]　芝林軒[しりんけん]流[りう]と云[いう]人[ひと]写附[うつしつけ]
○江戸中[えどじう]風呂[ふろ]屋[や]の遊女[ゆうじょ]禁[きん]ぜ創[はじめ]禁[きん]あり

同　二年　己丑

日暮里[にっぽりの]浜[はま]明神[みょうじん]社造営[しゃぞうえい]　是[これ]ニ[に]終[おわり]の系[けい]　初[はじめ]ノ〳〵と云[いう]
○大塚善門山[おおつかぜんもんざん]大慈寺[だいじじ]法華剣[ほけけん]
○二月[にがつ]ニ日[にち]将軍[しょうぐん]尚[ひさ]徳[のり]　ニ十七[にじうしち]才[さい]　三年[さんねん]ニ月[にがつ]七日[なのか]ニ云[いう]
○麻疹流行[ましりりうこう]
○六月[ろくがつ]廿日[はつか]武州[ぶしう]大地震[だいちしん]江戸中[えどじう]武家町屋潰[ぶけまちやつぶ]ス死人怪[しにんけが]多人[おほしにん]　上野[うへの]大仏
後年[こねん]ニ[に]ハ[は]ときゝとも[ときゝともの]
○五月十二日[ごがつじうにち]江戸城[えどじょう]大[おほ]震[しん]　平安人[へいあんじん]の記[きろく]

○八月廿日江戸大地震○九月琉球人来聘（正後奥志川まるまる之）日光山へ参詣

寛安三年　庚寅　十月改

二月山王権現社　御城内より麹町へ移る（一説あり寛永七年年に移るともいふ後百法二年今の所へ移さるる）

○男女伊勢宮詣（今云おかげ参りあり）

○三月廿二日夜江戸大地震あり○同月十二日俠客幡随院長兵衛死（手伝人に水野多左衛門ともいふ）（墓ハ今も浅草源空寺にあり弄斧岐の年回を吊へり）○五月関く波多

○六月同日流国毛隙（長同又寸）○六月二日より浅草観音堂内普請始る

○琉球人来聘○井紙起（あのぞくおこる）○八月七日秋又邪気大風あり氷隙（大井八九月より十数位）

同年　辛卯

栗殿山　御宮御造営（同月後鳥羽院宸筆の扁額を御再建あり一説に御造営とも）

○二月十二日将軍山霊廟（六十三キロ）○秋深川八幡宮あて獅子屋の法式をうつし流編る奥行始る○中村勘三郎芝居称宜町今銀町へうつる○十一月廿九日井の堂歌謡流行せしる

○十二月廿七日寛永寺厳夏の日長上人寂

辛巳年間記事

酒戦といふ事行る慶安のころ大塚の地蔵坊橋池上の大塚九度源左衛門大酒の案堂を造ひて酒を呑ひ事あり

○顔東を泥といふる水を泥といふる冊子あり（此ハ寛永二年ハ下ル迄せり池上氏ハ元禄後の事ともいふ）

○寛永日光東照宮の祭まて金銀丸船といふ事後河町及留町乃

外ふかき所の商人一朱もあるく金子一分二分つゝ殘或はかくの如
あるを殘斗智さき時は年代ぼ[illegible]芝濱茶の果よりも日本橋の南小
の町へ来りてこのくさ事あり是八宝町英通り町南北に町々る
斗殘奥にて数百人各こ奥くみて肩ぶりけ居てかしき殘ものを
を数十くものゆいこゝある事こ青物町ふあ智屋一彩見世をかし
て徳殘を交へ九十六文本数の殘を粒銀ふても今子芝分出て
も目ぬふあ智せ一本物も自去ある見世出こりとて江戸中
おの店へ来ふあ智しこり見を見て江戸中ゆ智屋の
見世ゆこりとて（以上事柳合考ふか拾るふ[illegible]
ふ考貞和丁ハ今ふあ智町のつゞ）
○おの時代毎年七月盆中ふいられい市中の男女踊を備し夜く
張り○淨瑠璃語藤ふ本杉山丹後塚虎屋源左衛門ふ者

あぶくや殘年傳ゆ沙ゆ者南北春ふ文ゆ行る

義政元年 己辰　九月十八日改元

正月廿日の御奥見濱 閏年ふり十一日ふ滅る　十一月曉雪深ふ降る

羅山文集

餅餐座上甲冑鏊　時有寒花發盂陬　鐵額銅頭憂銀否

雪如白馬祭垂尤

○品川寺水月観世音の堂を修造し海照山品川ふ[illegible]（ふ[illegible]弘法大師）

安亞有しゆ永禄十二年の兵火ふ焼ふて本堂武田方ふ[illegible]甲斐ふ[illegible]
今年九月中旬信ふ[illegible]ふ[illegible]流を御願し堂を立るふ久ふ[illegible]
○六月茅元寺辻切御禁あり　芋髪を剃りて紫の帽子をふる玉流を
水小路作詠市詠伊織於云りの踊ふ[illegible]
年出て宿
しとい

同二年 癸巳　六月閏

今年玉川の上水を都下小通して荒廃の用に充しめぬ

○玉川上水はもと西の方田丹波山の幽谷に發し同じ丹波村を
過て武蔵国多摩郡に入る田園沢一の郷なり笹塚渕村と七里餘支分
羽村まで十三里まなり六尺と十六里計にして羽田浦なり海に會す
元禄年号余　兼度元年の春玉川庄右衛門兼清といへるもの願ひて羽村
なり江戸までの水路を考へ同十一月上旬より堀割の役を命せらる
翌れば翌己巳年初夏なり仲冬に至り羽村なる江戸大木戸迄堀割
成り庄右衛門まて玉川の名を賜ふ也しとそ中渡流方武蔵方市中
水分水にて日用とす　赤坂溜池弁玉川稲荷の社ともの玉川
庄右衛門の勧請するところなり
○神田上水を開き一事は去延宝年中なり武徳編年集成に大久保
彦左衛門の命を受て水道を考へしより多摩川の清流を

小石川なり引しめ給へしとの例神田上水のはじまるへし　沾源流
玉川は江戸繁昌につき地池多きゆえ不足なる故兼度に成り
玉川を助け水を引れしなり　といへり中古神田上水再修のこと記
薬堂寺なり也とし松尾忠左衛門　一説に七郎ともあり　俳諧芭蕉翁の弟子
善徳寺住なり　俳家奇人伝に俳諧師とあり　上の方に竜隠庵といへる庵室あり
もしくは旧址を　世事世上に俗なるを嫌ひて故郷に帰るといひ又雑撰しるし一年に亦室二年なりと
さるに元禄の俗辞なるに江戸に帰り元禄十年の頃迄世に善徳の
事なきしるべし
神田上水井の頭の池に発し　多摩郡年礼村　若松池　同郡廻り田村の田所　妙正寺池　同郡
多摩川の水源の流中荒井村の東に入り合して神田上水の

助成とある今戸橋を新合村といふ（流落合ふ成の名あり）弁天村（流落合ふ）十二村を経て字る田村ふ到り田畑の中ふて二つふ分て一流ハ隅田ふ入て大洗堰（ふ）より江戸川ふ落ち一流ハ上ふ入て小日向を巡り牛込榎町の中を東流をすゝく牛込村より麻布ふ到るの名樋ふくゝて流るを公儀と号て流水業ふ樋橋を作ひ小川町を経て神田ふ到る故ふ神田上水の名あり又一筋ハ神田橋うち竜宝橋より本郷町本町辺ハ京橋を上水ふ材木町辺ハ京橋を上水ふ支國の辺浜町等ふ至る町数凡二百七十丁程ふ及ふ

表上ふ流る通せきる所ふて赤坂溜池の水を引て溜所ふ溜ふ沈ふをまくうこふ引て用ふるゝ〻ふ引ふ殊ふ不自由ふ成りゝふ

殊ふ水の多て万民恐ふ溺ふ快楽の思ひをなす事疑ふ

沖悲澤ふ行きてもなほ多りふ成りゝやいなむ

○正月二日牛込沖門の内青山某の娘女蘭といふものあふ秘蔵の皿を破りて害せゝるを霊魂出ふりをあせゝ事人ふ知ふ多し

まゝとも未実否を知ゝ沙汰なるゝ所ふ成るへゝ

○九月琉球人来朝（正徳元年）

○金雕工吉長氏祖重次卒（八十二才）

○竹内式部易行院小俠客助六墓と称するものあり入浴ふ信士

第廿二年己巳二月十一日と為し例ふ女の法名あり（文政年和文化中鳥ふ焉る乃年しるあり）

乎殺故芝居ふ作り

しるの番花を拓く

第廿三年　甲午

浅草寺観世音開帳（此時賽銭を金三百両の入札ふ成し賣法せしと云）

○今年町奴沖穿鑿あり（芝の市ゝ兵衛屋敷の中ふ大樹あるを切ふ成ふ切ふ成ふ）

喧嘩を仕りけ諸人の妨せしものこれ方組方方云ふものの碑世に前の斉藤考柳子翁の用捨第あを見て生涯をあらためこの男浮世の門山中深たろうという山猫事件
稲町まで法もあて仮初の辞世

ひんざ屋ひんなるべいろ町ぞろ〳〵仮がつらるべい

こまに初ろ云ふこの時の町奴の名三十四人佐藤小見えこう

○市村羽左衛門ろ芝居あて初まる牡丹を始む弱き牡丹云ふ女髪を
うあて高麗屋頂城賀の辞を仕組繁切あ高麗屋坂田源蔵小松顔屋小
せしとり芝居の恵名を源蔵と云しこと　この仕上方とり小唄三味線の流儀芸をよび下せり

○十一月十八日将軍休御長伝率　七十八才

此年間記事

兼題中芝牛町とり品川まて浦佐ひ屋場ゑ垣を命せ遊ろ
歩まて集ろ〳〵ろ有　武蔵志料あ

○昔〳〵相模小云芸ろ安の頃夏屋ろ年強き帝船ゑて深ろ〳〵ある凡六
百根船を拵へ有る淺草川を乗出してもぐむ是船遊山の始りあり
翌年大牙流もある故仕ろ多く大勢乗る故小深しろ〳〵仕又翌年
大船を乗出ろるもあり兼度の仕船盛りろ〳〵小潮騒の為年冬月
江戸中の大火事後三巳年船遊止む寛治の仕又ろ深き船作り新
流人屋を壊く船作ろ大く減ろ故ろ七八ろの屋形船あり後船の
名をつけ川一九雲東九大雲九山一九鯉一九十ろ一九ぞろ名付ろ
矢ろ為ろ〳〵矢を云ろ〳〵御鎧年十人ある六絵十年ろ簾の陰く
掛けあろ〳〵足を武士のもどとする云く　中古船涼者月の船大ろ〳〵ろ役を住城と
せる故活人多く活小他まろ年井ト養
相模集小ろ役
とい〳〵ふところあて

山もとのう又船もあり川もあり数ひひとふさこんまこの京

同書云　文を異に むりしハ女子ゑ掛とりある時ハ表面といふ物をうけて

髪を見せ候悪女達七夕已後絶人不まゝにて女子計付歩行者あり
浴衣の後面をうつる之姿の所迄人あんめう稼元うつきを出てあり
しかし一方治の所より江戸中歩む大火ゆ已後ふくめんの上不出ぶちと云編笠を用ひ居候寛文乃
比不松坂といふ笠是なもそうあり八分五厘
笠を用ひ又天和の比貞享の比より編笠止て菅笠不用ゆる云〇大身ハ駕舁小身の人ハ侍荒上下とも不
上下又ハ袴計出して役宅を元て歩行する人もあり又ハ駕の
二尺ゆ多拵て鉄砲ハけらく人もあり中間も一寸ゆ多拵
して有る云〇猶元禄中丸子村羽黒権現ハ天正中の勧請なりとり兼意の比奥及今浜のせみて
〇稲元禄中丸子村羽黒権現ハ天正中の勧請なりとり兼意の比奥及今浜のせみて

小亭三尺とい元禄中のるうこ中風を煩ひ見あつて外歩行ハ出ず歯落て云流ゆ比終
外歩行自ハ出るよりて両社を祈りて両社ゆ出仕して帯刀を勤り又清人(神)祭ゆとあこ分れて
江戸筆を在の法人系清祭ゆ比るゆ駿しうゆ不出唐三年江戸大火の後自こ
おして条情
終りしこそ〇兼意二年刊行の江戸図ゆ横ゆ彩色今小柳町の所あり
濃草法門内ゆ喰町の辺不雲光院弥勒ゆ命ゆ人ゆうゆん雲
通ゆ清安ゆせんこゆ駅数ゆ日輪ゆ知見院ゆ祈田川の今云
新しい橋をゆんゆん橋祈田橋を大炊後橋と記り日本橋雲後
より南横町迄の町名の内後藤源左衛門見後橋芝宅雲宅弥兵衛南
あんこおひこセイフン言蹴飛治橋祈ゆのあうゆん通一丁目ゆうゆ
ゆうゆ同二丁目ゆ例ゆうゆ町裏ゆうゆん世三平高いゆも町裏
今春七帝とあり七不を八号町又作川町の小ゆも八号町有山王
法筋而今の辺ゆあり清祇橋辺より南八ケ場迄ゆ流寛永の号ゆ方

教寺あり〜〜の塔〜〜移りて今深大寺武蔵野に改まり

明暦元年　乙未　　四月十三日改元

梅翁句集に年号改元の事因

此暦や梅のあ〜〜ふひ〜〜るか

といふあり改元いに月ありいふ

○下谷三橋ち宝剣湖山聚蛍　和尚　和尚は寛文元年廿十月翁百寂八十歳翌丙辰大円宝鑑国師と諡号をあ

○玉川上水今年ふ初り金〜流れ出せり中嶋田間堰ふ

○市谷正安ち月橋ちと坊〜〜毛○六月廿五日於本丸二章　称之ちなし

号石田孝人浅草法華ち年華　○九月朝鮮人来聘　正使翠屏翰林副使秋潭諭陽従事南竜翼張宿本書ちと韓人日光山参詣を名如春浅草ち中医是院ふ宗藩を林氏号攘也一説に修芸院ふあり下谷ハ浅草砂利場の辺ふ文庫を建て浮の書籍を収め法人ふ給しむこれを浅草文庫といふ　同　浅草流汐町の小裏ふ塙田加州侯の屋下中屋あり此門いふ大なる土蔵を造りて内ふ和漢の古書を

紀〜〜ら世ふ浅草文庫と称しけるといひ

同　二年　丙申　　四月宝

正月廿二日夜赤雲あふあり○正月ふ初びせのゆ月己の屋安ふて〜〜家の恵〜おびたゞしく若しかるまゝ今まで〜〜

○浅草ち山門のにたるこの比波を奪ふて世ふ云ふ〜〜ち浅草年表ち

○六月赤雪あふ方ふ九月ち雪の如くふ二年あり

○六月廿日ち〜〜観世音ち勧進練馬汗　郡田橋ち田楽の表　○浅草ふ於て粥流

浅草建○十月九日吉原町を改ふ　　吉原ち代地として新方ふ二百

坪の地を日本堤の辺　千坪の内田地ち　ふて下さる引料として今ち方ふ安

ふ百刻十　下さる〜〜有命せ〜〜る○十月十六日夜吉原町ち火出風

強く中橋南鞆治町桜町辺焼

○十二月十六日茶人今森雲乃慶庵 名長迫号宗紀

慶長二年 丁酉

正月元日江戸行町火事 江日赤坂町火事 五日吉祥寺辺中石町
火事 ○正月十八日乾大風 未刻より申刻まで烈風
湯島神田辺浅草御門内町屋通町筋 孫金河岸京橋八丁堀
早嚴寺辺 浜地海手細川深川 翌十九日巳刻より石川辺焼
茅町 新寺通町より焼出し 牛込辺つ田安辺つ 神田橋辺つ常盤橋辺つ
吳服橋辺つ八代洲河岸大名屋敷 御旅所 焼亡 又同日昔
町 麹町五丁目つづき より出て 半蔵辺つの外 麹町辺つ 紀伊殿下屋敷
茅場の辺海まで焼亡 此度焼死 万石以上の屋敷 百 藩宇辺 旗本
七百七十 藩宇 組屋敷 数を知らず 社寺 百五十 藩宇町屋

四百町 行町八百町焼死人十万七千四百余人といへり 後て幸所
二町四方の地をあひ非人をして死骸を船にて運しめ 塚に築て
ち院を建て 無縁山と 無縁寺と 山号 寺号 浅草 本願寺 一日に
焼死 二日 七日の夜 火災
無縁山 無縁寺 所〳〵に 粥を施す 又町毋〳〵 銀子
吉宗 英明 合ふ 二十六万 二百 二万 二百 二十 銀六 八 を下し給ふ 因獄の罪人を少々の附 この時より始まる
むきあぶき
ひかん元〳〵
視聴雑集 江戸田舎の後仮小屋を建つらひ 人を憐を乞て
ちまいひあらそいたむ法の心 小尾 昆陽 世の中の安き治 吉川惟足
正月下旬 吉原町小屋掛を命せらる 事師合考 この時一旦左市の内分の移
六月今の地へ引うつり 吉原町と号し 八月より商賣をなす

明暦三年四月晦日の江戸絵図の内えどの図に江戸一二丁すじ町糸町新町の名ありて
揚屋町の名なし　是いえどの図二丁目の地を今の地にて不別場ふしてそ代地をあたり
し故すじ町の向ひにあらしふ町をひきさきたりしこと町の中ふ二筋三筋あり
揚屋を一つふあつめて揚屋町と名つけしといひ　えの地の辺にまより三筋町と
町新堀町あるこ猶の名目なと　○三月廿三日羅山先生卒　七十五才　墓は巻巳乃
ふよりめてこ新町名ふ移るとこく　列業ふ事を元禄十二年
の頃後年迄
山伏町ふ移る　○大火の後江戸中町家瓦葺を禁ぜらる

此年間記事

東本願寺移因明寺の下加賀屋敷と唱ふる地の為ふ賜ひ
中濃寺今の地へ移さる　大火の後なるべし　東今加賀屋と唱ふる地と本多
肥後侯の内中屋敷花房町の西ふ当時中屋敷あり　此辺
皆武家屋敷なりしあり為ふ新堀山町の辺とう築地へ移る
○武蔵鐙（あぶみ）こいつる若紙ふ　此歳の大火の事を記せる也　後の事をいくる併ふ自新町
とう柳原土手一帯の内これ三ふ江戸人ふ石を以て東西十町
あまり不土手を築せらる　日本橋の南茅町とう江戸市近の町屋を
移りの為ふ　そのあとを江戸川端ふそのて少をうけ東西弐町ずふ
上ること又日本橋とう東橋まて八町の間ふ町屋二ツ所を元のけて
今所二十間ひろくひろくあまり　是八町屋敷ふ　せきあひ強人のやう
上ふ人迷ひもとを秋八月火を出ふ人をそこなふ事の為くふ
四土手を築さるに江戸中のものいふ添事ありしも選ばるやとた
為ふこの地ものありしこく
○火災の為まて日本橋通りてあ北の側細き毎て五軒町（ごけんちょう）といふ此所ふ
墓所（ぼせき）を作る立居さるものへなり
○後茅場町ふ　茅場の為ふ橋四へ移さる　後元禄
始の比本所ふ四へ移さるとて本所茅場町といふ

○世時武家の靡郎後漸々又寺院も不習あまくこれ有右様ちい
ろいろ掘ちり汚辱を移る（文化四年右様ちい掘ちり因ち表つの事りあるゆへなり
寛文ちう元祖院殿この江戸屋敷も事右様ち掘ちあるも）
靈山ち源空ち法禅ち以つまも湯殿ち上ゝ大火後浅草ゝ川ち
掘ち昌平橋ちり谷中ゝ移る競馬ち八丁堀ちり浅草ゝ幡随院
院日蓮ち（今の本堂掘の西ゝ）堀ち頼ち（今の小柳下近）神田ちり浅草ゝ（雷神ち天嶽院あさ
草市門内ちり浅草今の地ゝ移る
○世時代今のあき家食を南ちの文ちふ浅草ゝ移る浅草ゝ今の山乃
門おゝ始て葉隠豆腐汁黄蘗大豆まをちゝ（ちふ民家と名
付けゝ）をせ〜を江戸中掘ちり今の山のふもちゝ始ひふ四うん
とて孫の称〜〜ゝ知るゝ真〜〜ちゝあり
○浅草見附茶屋底動出年清盛屋利兵衛といふ記者ちゝ始ち

牧牙船を製て山岳通ひの案ゝ毛ふ無ちる又所ゝちり色きちる
事ありて通ひ〜もあり〜〜ちり（寺源考ち源の事紙ふ要〜　ちるの日のゝ
ちるちのごとちう云ふ〜もゝ所ちの事あり）○葉煙草（ゆちちけて柳ちちるゝ云れくそ色きちふ
美ふも一つあゝ）〜〜ぬゝ（煙草ちうの山へのうつけちの
○延宝年山城富士山の噴火の遠近紀行ふ鈴ち森ふ発明ちり
一ゝあり〜毛を始ふ不ち声ゝ於の〜を江人愉ちゝあり第意
のゝ〜ゝもあり〜ちゝん○第曲柳川検校八橋検校行る（八橋八賀天の事ふ発ちり）
○延宝三年の江戸図大坂町（今天満ちる町二丁目）
あり神田鍋横町の漢丹事美ちあり
万治元年　戊戌　十二月国　七月廿三日改元
正月元日夜市谷安養ちゝ世秀琴の美ふ白衣の老翁能を
和弁を弄〜白狐ちあり〜ちるちゝて稲荷社を建ちり〜

より異形着しと江戸砂子にいへり
○正月十日本所より出火、引續江戸中大半焼亡（寺方城 東岸）
○三月木挽町海手並坂小日向等築地出来る（牛込江戸川山を築土の為に崩し小日向築地の時この山を崩し）引田を埋地形をなしけるといふ
○四月十五日狩野素川信政卒（五十二歳 外記）
○六月九日嵯峨善之順死（中村勘三郎が元祖なり）○夏三田の地に会津侯の別荘の地をあたへる此地は渡辺綱が老後に住し旧跡なり綱塚と称するもあやしく松樹を植て遺跡を標せり
○狂言師鷺氏寛永中花子の狂言より名を挙し後遁世して（寛文十二年夏弘文院林恕之先生因墨の記を作る）道休と号し携協鏡が池の辺に住し一口の鐘を鋳て手習本堂再建の縁起を記し又池の中に弁才天の小祠を建たり今年七月廿七日七十歳にして終れり（洞房語園にみえたり）

○八月江戸中髪結株一町に壹ヶ所づゝ八百八株に定る按るに江戸町数八百八町といふ事此時代の事也（寛永の頃めぐりにも八百八町のことを記せり）今は千六百余町に及へり ○今年日本橋本橋普請始る ○九月十二日唐僧隠元禅師摂州普門寺より江府に来られし時湯島麟祥院に七十余日逗留あり貴賤群集せり（この時歳六十五と云）○深川海福寺草創（開山隠元禄師）
○同浄心寺草創（開山日義上人）○日暮里経王寺草創
○嘉山洗園斎翁江戸に遊ぶ秋坊京へ遊紀行あり
○今戸村百姓九郎吉が男九郎助畑中の土中より稲荷社を告示へ掘り出し是を九郎助稲荷といふ ○九月明の宗師國姓爺鄭成功卒す本邦へ援兵を請ふ事あり（名は芝龍又森官といふ今年三十九歳 日本の寛文六年に卒せり）
○東海道名所記成（浅井了意作 寛文中板行）

万治二年　己亥

正月二日より二月廿四日まで火災百五度ほど焼人安堵ころ
あらずしとぞ　世説江戸大火とあり　○日本橋を掛改らる　武家諸書の橋を立しなり
江戸始て白木橋掛変橋ほ新しくいろいろあるん変永の初づまりぐ
の景色もきれいなりしのあり　けとも紀史玉篠次といふ人さう好るといふ
○二月山崎宮疫病再江戸を遊八月帰京江再遊紀行あり
玉藻報答東遊あり　○四月廿一日永田弓場山王権現社今の
地に造営今日内廷　番地に内裏あり　後を隔て山ほ立しこの社地狭く火災の時新橋
の異あるる為高所の而松平弾正忠屋敷　○朱舜水生明末の乱を避
あてて日本に来る　彙あ生の事安倍弥兵衛の子を養て洋ちり
紀望年生　陳元贇二歳ほ子浪る
○七月二日大風雨洪あり　こうてゑ天ほと築とるといふ
○九月深草元政法師毋を携引て身延山ほ詣ける次ほ江戸に下る

紀行あり　紀行文紀とい
万治二年　紀行
九月九日江戸にまうでる上人宿はくおのふとりの法華ほ入て江戸へ
出きぬたそ見ほ日本橋のりふつく二階ある所ほ月を見て
日本橋邊　日本秋　更無一事撰心頭　今宵新見江城月
影満扶桑六十州
せんき不ほ並居てうまくある後ほ唐のやまとのなこころんほ入りつ
歌日あらとりん或ハ詩歌ハ寄よみてんを書りともあり毋ハ六日のあ
さよりそこの波ほのミ居ぬつ井の余所ほ見ひ出こちしてうろめさ
言る附あ一武附紀義とも旅宿の月といふのをよまんとそよめる
ふさしまのてらまるあ紀新も旅ころも袖のミ曇るむさしの月
う紀あるる宿ひまあ一茶枕ほ秋を紀武蔵野ほつき
月もまこまとぶひませすこ国川紀ひき秋ほの森ほ入て
○下谷永昌寺ほ下谷長者　長者町ハ長者屋敷居の所ニ云　の墓とてあり上光院殿お茶会
寛安居士万治二年亥九月廿九日とあり幸号ほ[illegible]

けきと長兵の子孫あとの墓あり

○神田川堀割の事偽彦彦（命せしを今年に普請始る）

ふいとう大川より柳原通り茶の水下迄掘通る舊地例

外辺ふいとう清水御廟地堀あり来して大川へ通ずと云る（此揚土を八小石川小日向小塚沈おき）

東武御地と隣接の八赤城明神下より同白ふ勅望まで田畑あり江戸川小石川へ接てあり飯田町下の堀とあハ江戸川の堀留なり

○今年より市所深川浜地海ふ地を築立をひきて川を通し橋をもうけ武家屋敷ふ市宮ふ市あり寛政二年回向院と今の浜重三郎貸店の通り町屋対陸りを市所の武士地町屋ハとり

て元の田畑となり元禄元年又昔の通り武士地町屋となる

○十二月霊巌寺深川へ移る（此地秀一円寺寺所半橋ふいあり社のミ今ハ残り）

○十二月五日吉原二浦屋の名妓高尾死（てんよう二年）

山谷春芝院ふ墓あり又同西方ふもあり（方法三年とよろハ誤あり雄世さ和風ふ）

ふもとの観音ふ

高尾六人あり山本菊の寄ふ所考ふ考ふあり又押亭菊の高尾考一冊あり未稿ナ上せし

○今年より江戸町へ新道ふ多くふ出る

万治二年　庚子

正月十四日十八日大火有ー市ふ露叢ふいとう

○谷中交命院七面宮再建

○本所回向院建立成（明暦丁酉焼死十万七千人の死骸を葬り）

一宇を剃ーあふ法華堂といふ所ふ其日秋葉ふ不命佛を唱へ塚上ふ朔像の観音を造り安置

ーし又山門を建る前ふ二世信蔵と云まりこの山門元禄の火災ふ罹り今ハ一間ナ山門代ふこの辺

をもふ市と云

○両國橋始て掛る

橋ハ隅田ふ長九十六丈幅八丈橋と唱り後ふ大橋

始り賃銭元禄年ふ成就せしもいふ度貢とりふ出ふ今の橋賃ハ

なく法ふ市ふて雑役せ一ふ川村随見今の西を見立て云上一掛けられしとり此方

流矢の災

ふりとあり

題両国橋

杜梁新建拗長流　人是陸行吾在舟　疑似猛竜横卧勢

驚峯先生

總州為尾武為頭

○本橋町五丁目ヨリ森田屋ヨリ出火焼亡　板代く勘ヨ　とも云

○五月霖雨ヨリ　○九月廿五日出羽基所二世大橋宗桂卒　二ヶ板上行ヒヨリ羽基勘兵の源

○むさしあぶみ二巻作行　俗説大火の事を記せるなり　此出ヨリ版行ヒヨリ

此年間記事

上野ヨリ今泉二丈二尺ノ大仏の像ヲ鑄方法の法ヨリ食涼雲再建ヒ

ヒ法ヒ清仏ヒ元孫ヨ　いろ平方ヒ遂ヨ　○芝ヒ日法寺稽荷社勧請

○大久保法華ヨリ七面宮勧請　○明人陳元贊波國の乱を避ヨテ

来朝ヒ江戸ヒ三田春町永井山ヨ居ヨリ偶居ヒ浪人

後世ヒ書ヒ磯貝次郎左衛門ヒ浦ヒ次郎ヒ語りけるヒ明ヨ人を

捕ヒる術あり家ヒ校を見るヨ有りヒ有りヒ二人ヒ術を学ム

元禄ヒ工事ヒ紀側流柔術の始ヒ　元禄ヒ寛ヒ十一年六月九日八十五才ヨリて尾張ヨ終ヒり紀側流柔術　後世ヒ田氏ヒ長ヒ家ヒ伝ヒ家ヒ中ヒ安永年中の人ヒ中ヒ門人千数人ヨ及ヒりヒあり

○万治の比後藤の河川の辺ヒり酒楽ヒ　○この頃江戸ヨリ法人の願ヒ紙帳の門ヨ入ヒ　ヒ問ヒ八人の後を殺ヒて　ヒ代女ヒいヒる

芝紙ヨリ八人ヒのヒめヨ

寛文元年　辛丑　八月閏　十月廿五日改元

正月十九日の夜光物あり　○正月廿七日碧海郡町屋ヒり出火大火の辺飛火橋京橋の辺

ヨ焼ヒ　○正月廿七日碧海郡町屋ヒり出火大火の辺飛火橋京橋の辺

ヨ焼ヒ　○勅進相撲今年ヒり毎年

本橋町まて武家方町屋殿ヒく焼亡　○

続ヒく奥州ヒて　○二月ヒり伊勢宗腐（男女乗ヒる事殿ヒ

○二月十二日林漢斎卒　三十八才名ヒ信号函三子　薙髪ヒて春徳と号ス

○正月年号改りし事

[illegible]

[illegible]川の事角力文
[illegible]のすさびあるべし

○六月今度小石川通新橋[illegible]人改造[illegible]深川に不[illegible]橋不[illegible]川
[illegible]年[illegible]る○秋九月年来の豊作と云

○八月二つ谷傾城[illegible]不[illegible]く[illegible]て[illegible]事を停[illegible]

○十月廿八日江戸大火あり[illegible]は[illegible][illegible]

○十一月二日[illegible]藩内[illegible]火を[illegible]

焼亡

寛文二年　壬寅

[illegible]く松[illegible]今年[illegible]七日不[illegible]○正月[illegible]奴[illegible]

[illegible]用[illegible]く又[illegible]不[illegible]り[illegible]行[illegible]を停[illegible]
河[illegible]一[illegible]策[illegible]くいの[illegible]を停[illegible]る

○正月廿八日[illegible]等[illegible]作[illegible]　九十[illegible]古[illegible]賞[illegible]の[illegible]あり平[illegible]
[illegible]代[illegible]古[illegible]を[illegible]

○二月廿[illegible]日年刻大地震○五月六日[illegible]より廿日まで日月[illegible]事[illegible]の
[illegible]○九月[illegible]岩[illegible]桂江[illegible]吟[illegible]藤○九月廿三日不[illegible]の[illegible]る[illegible]
[illegible]の[illegible]べ[illegible]る[illegible]江[illegible][illegible]く定[illegible]速川

○九月麻布一[illegible]松不[illegible]上[illegible]る退[illegible]の地[illegible]る

○江戸名所記[illegible]行　七巻[illegible]井[illegible]
[illegible]

○市村[illegible]右近[illegible]海[illegible]
[illegible]の[illegible]を[illegible]行して世不[illegible]る

同　二年　癸卯

正月廿二日[illegible]七代[illegible]　○五月天下不令して殉死を止む

○六月十五日[illegible]弟不[illegible]谷安[illegible]稲荷社勧請

○羅山文集刊行　百五十五巻六十本○毘沙門寺満宮今の地へ営建移つ
心字の池及搦手濠　此年八月幕府礼祠典沙列の儀式宰府の例に倣ひて本所の地を巡沙も搦手の句集に本所西安寺もの所にて成る附
一株花ともうつる　ものの移の　○本朝編年録を本朝通鑑と改めらる
○八月十五日毘塚添湖の冥山会を無尚　仔皿子乃ぶ　念仏三昧を
行て終せり○今年より天和二年に玉川上水を毘戸村に引を
さしめらる　平安方角の洞庭を鑑て掘る所と云伝に耳白しといふ接及く　毘戸先に掘り　梅暮句集　江戸本所新堀出来て一すじ風や冷冥
天下一番之文

寛文二年　甲辰　五月閏

冥賀長八幡宮修営○版田町法蓮寺入水命せらる
○けんぜん蕎麦切始る　價八孔　つゝ云○七月七日連雀師匠村玄俊卒　九十才
○市村作兵衛玉川上流を掘て元禄元年迄其間　後世云引幕大

之真宗たるべしまる

同五年　乙巳

正月五日連雀師匠村法眼玄陳卒　七十五才
○秋絹布の長サ二丈六尺不定らる○八月有高人士鞭の古死を弔ひ
く見んせうく集ゆまりきたる有市津く会せらる
○八月幕府の医師立川春節江戸へ下る紀行あり鎌倉紀行を
合して二巻集と云　春節は儒学又有職の故実
○霜月冥土へ安西門跡西下向の時隅田川あり　あり今義解も武人に沙せり
　　帰るさの冥途の里不知もあれ来すとも川原のあるぬ孫子　道見親王
○法橋秘録の要を摘て云江戸本挽町に大和尚と云医あり
又同町に保達と云弟子御長谷川助蔵といふ浪人彼芸を養ひ

入魂一人くの御入魂ハ第中御召男女の媒妁等の仕業して御
物を受賜るる或法度の品女縁組の事ハ御法をうまく下りくぬ
くみをあせ一うい中寄所して寛文元年八月迄御せらる
其後ようして諸社寺を改人を芸藤といひけるとぞ

寛文六年　丙午

三月廿六日人形のまく死光物東方ふ飛ふ　長二丈廣
○所受所絶の俗配流○東叡山護摩建　所の護
○中村勘三郎芸居あて太鼓をたゝむ　手摩安元年代紀本の系譜ハ見えず
○九月一日林梅洞卒　二十日ヒ　名敦号梅洞勅号
　　坂子春伝と称ス
○芸金移海を百隊るの地を細干協乎沢所一同十成年九月町割
ありて新細町といふ

同七年　丁未　二月閏

三月廃中六所宮法再建
○四月新宮并大納言下向の時南田川を渡
　ゆる社名の新宮まて隅田川不浄ハ乗ふ船人　雖渡井ハ
○五月櫂井宮隅田川遊覧あり
　おとゝ丸ゆるゝ御船ていとく新ら遠き隅田川
○七月の末吉川惟足翁神道の学をあて　吉川惟足の義ハ神道宗
　　源をひろめ生徒をすて家を起せしと　源をくみ入て二重の
　　視聴事集　本所の社地弥仮の後神ハ仮ひ叫ひられた
　神垣のゆうひもうあて光のあゝ立あつあて御式ゆれ
　あゝあり本の所をすくゝて絶るを法く無のまゝりこゝを
　　を亦三貫あり社地をあるゝ一八文家中の名なり　社地ハ三家比の神社あるへ一本所
　の地むり一本所と云一を元禄元年本所の文字ハあゝくゝめ一中成出ハ見元と是中

おのゝ〻ふ事のところとよめるなるべし
はるゝ事なくしとしるべきなり
○同月浅草東漸院（とうぜんいん）にて道人著（どうにんあらわす）和尚入定（にゅうじょう）
東漸院の開基にて大食の聖あり念佛の服法を刻
あるべきことなくして不分俗にて安座同月廿日
年年二月彼岸念佛の始め寛文年十月廿日
及ぶ数ありて世の中の無常を感じて
師ふ出家して世捨せんとて今年十月十八日十念をうけられ
髪を剃んとて剣をもて完ふ入滅人念佛の声と共に不土を投入て行ふ
ちて十月廿日ふ死く念仏報恩ふ為ひ記十七才ふして眠るごとく往生
なるべし原来清雲軍集ふる事数一ならず
しかるに以上江戸名所記の文を略せり

寛文八年　戊申

正月廿八日乾の方より巽の方ふ竿のごとき白気立夜に時に消る
○二月朔日未上刻牛込酒井家ふ下屋敷より出火筆箱町迄
士町市谷田町ふ至る同日又市谷天龍寺内より出火紙戸同
屋敷ふ類焼同仏屋敷上浄瑠璃坂武家方六番町ふ延焼して五番

町二番町猫町一丁目より六丁目まて横田辺信濃屋敷ふ
あるひふ迄ふ類焼方新橋まて流辺ふ至る又出火の方上より
出火後河岸辺神田橋藤倉ふの岸日本橋まて焼亡三方の火ふ
一所ふあり武家町屋敷ふ焼失せり又同武家町谷竹甲
より出火大名屋敷ふ〇二月二日日輪二つあるふ似て見る
○同月廿日辰ふ刻鍛冶橋より出火大名屋敷ふ焼赤坂町ふ
日ふ至へ延焼して三田ふ町武家地ふ焼亡
又同日ふ谷東坂より出火下谷広徳寺町屋敷ふ延焼
所へ延焼一二の橋町屋焼亡〇同月六日未上刻小日向築地武
家ふより出火新寺通町牛込ふ二つの内八幡筋焼て田安ふ門
のうちふ入又排水屋敷ふ屋敷より出火本寺通町飯田町餅の樹

坂迄まて焼亡　去二日のひ未申武家屋敷二千百廿軒町屋百二拾七町寺院百廿九宇百姓屋敷百七十軒といふ

○二月吉原廓内より出火をひろ死場町伝見町と号る（伝見丁八年前の古稿なる故ゆへ名つけしなり）○二月町人常刀を帯る事を禁ぜらる

○二月幕末出下向せ時

月光花葉をあらして作き見る雪を雲ゝの家とを名字見（家を井雅章公）

○夏猛暑　○此月ちうる坂出つ流く出火を流きの虎の出つと出つとりうり

幸橋出つのるく狐橋を掛くる

○狐宿ちう軍宅小坂坂村土中を穿ちて金像五寸の観世音を掘ちう背を刻して弘長二年二月とあり墨人茶毘を営て安置まて夕敷の観世音是なり

○十一月十三日後鳥八代帝崩御率（三十二才）○或書に寛文八年江戸市中三番の観音札不焼りて大洲大洲小男女歩行坂迄焼ものと伝へれしとき○昔く相撲を云むりしは寛延又は宝暦又は十八歩ゑ日万日の回向抜とて人集ひる事あり寛文中年不焼ることあり

寛文九年　己酉　十月国

二月江戸浅草十王堂焼亡○二月二日流星東方より吉雲のごとし

○奉行人お暇り二月二日ありしより今まとり二月五日と成る

○飛戸を満宮社地を法性坊を勧請し社を営む

○七月振美人丸を祭る十月まて小松原長とり平ぎ

○七月十八日俳人石田未得卒（八十歳戒名芳雪居士）○八月十日大地震

○大阪河原流寛殺人作と乗久左馬寺井茶左馬叶

栄雲泉市左馬号なり

寛文十年　庚戌

五月十二日辰下刻より巳半刻まで歳の如く成相隙砂のごとく

○八月大風　○下総佐倉不思議弁才天社の祠不地を築立小堂を建内外の書籍を収て法人ふをしまびて紙とろむ　天和二年東えい宋学寮を立宋籍をこぞりうつす

○本朝通鑑成　二百七十二巻　羅山林子号叟二先生編輯

同十一年　辛亥

下総佐倉不思議湖中新不築く不の地へ稲荷を建る

○白金瑞聖寺創　開山木菴師　英雄郎弘之　○七月浅水長法寺毘沙天満宮へ唐銅の額を掛ル　○青山流行寺創

○七月琉球人来　正使令武王子　○八月廿九日南大風雨波浪　濱茶下谷　小日向を初

倹き所人家床とあるを常の如く所辺の船くも船場を

多ふひらる六々掃抗五十万隙あがる　○十二月十二日晴天震動あり

豆腐ほうろう

同十二年　壬子　六月宝

二月二日牛込浄瑠璃坂敵討あり　夏年深八とふりの業をうくひ親のうくき同捕縛人一部を付ち遠流ふ寄せる ほとと

江戸名正記わくさ記のひとりふありその沢の報ふ弁ー「くれきこ

浄るり坂のうち記討さても手後流されもけり延宝六戊二月ふ刺二続ふ般発者

○二月初旬を左祇樂ふ新貨沢事を止らるる大佛を差のせ町中勧を

以て沢りの差うべぐうを見法の行人新れ穿鑿あり　うべぐうハ人偏洲蒙図量ふのせて表裏の

男行徒ハ刃をうくぬきさる形の拘束ふて徒刑あり　○国六月海日大橋流等道狭大橋を改年　おを結沼

邑宝録ち弁禁ル　○七月十日狩野元俊秀伝卒　八十五才

此年間記事

太の大ち

不思議弁才天の高へ石橋を渡して参詣の通路とス　此橋ハ寛文ふ弁ふ築くふふて敷れ

しるふ来ふ記あるくそふ

形を表あるさうしへ　●品川御殿山へ桜苗を植させる

○軍学者山鹿甚五左衛門（名は素行浪人なり）寛文中漢を犯し古を法ぶ学者の部に漏せしを延宝二年ふたゝび刻し返さる（貞享元甲子九月六十四歳にて没する年延宗多くの著述あり）山鹿流十八部の書を編輯あり　○江戸にて代八車を作る八人の力にて代る者なるべし世事談綜に云（神田の大八車と云ふのは石川雅望翁の事なり）

○始て元結を製（案の一本に永仮六年木の実の麻糸にて作る故の下に文七元結と云ふ）

小物の紙の下の名なりしとかや新撰子に文七と云ふ元結きの名をつくる紙の名を也に製し人の名に用ひしなるべし其角の蓬萊町の住居の隣にて元結を製しとの事も見る

○泄川代男保達六方組なるべし（深川十万坪にあり）

斜首なりしとぞ　○大の頭俳諧師来游来孫加賀一貞一世友情ふ

吟の師なるべし所多　○隆達節（隆達は堺の人なり世に琴引と云ふ元和寛永の比なるべし）

節に歌ひ流せり　義太夫節大夫節加賀節の小唄流行

○浮瀬り浮瀬り掃部丹波掃（倉本氏）虎屋永軍近江屋源兵衛土佐掃

薩摩外記長門掃　石見掃　紀茶掃等なり（浮瀬り小唄の事は予が声曲新纂に詳しく）

○春鱠殘魚洗の事　江戸にて初る人なりしと　寛文中上総国の

の漁民大田仁左衛門と云ふ者　延宝頃鮑の殺法を弱法師

（安永三年下本）

○大の頭俠客の額を掲上る事　行基　あり　浪花の宗因江戸

にて　俳深員八十左衛門の家を見て「名月や東海道よりよく」

家きれ　見廣く掲上てる也　唐太びさひ唐太掃等なり

家つきよりあり　但　橋を傍に勝い兼意のおろかなるべし　古

小弗小兵衛と云つる

もはこころの男達なり

○寛文十一年より十二年迄摂行せる遠近道中江戸図有（五枚分川

小八幡坂弱迄雑司谷弱八幡弱青山渋谷南八幡弱目黒橋

南二丁目經師加茂傳授とあり　郊祀をかゝる事
こまかなる也

武江年表卷之二畢